



山中克郎・澤田覚志・植西憲達(編)

UCSF に学ぶ できる内科医への近道 改訂 4 版

諏訪中央病院 内科総合診療部

佐藤泰吾

改訂を重ねられてきた「UCSF に学ぶ できる内科医への近道 改訂 4 版」が出版された。私は山中先生のこの著書から多くのことを教えられてきた。今回、何より印象深かったのはその表紙である。「子供の医師」の写真とともに「One is never too old to learn」の言葉、そして植西憲達先生のお名前。私は心から納得させられた。

山中先生には 2009 年以来 4 年間にわたって、諏訪中央病院で「教育回診」を行っていただいている。3～5 日滞在していただき、研修医たちと症例検討をしていただく。研修医は今まさに自分が担当している症例を山中先生にプレゼンテーションする。そのうえで、山中先生とベッドサイドへ足を運び、病歴や身体所見を再度検討する。山中先生はとても穏やかに研修医や患者さんの話に耳を傾ける。決して多くを語らない。そして研修医が自ら言葉を発することができるように、ゆっくり丁寧に議論を運ぶ。その過程を通じて研修医は多くを学ぶ。

お伝えしたいことはその後のことだ。山中先生は休憩時間になると研修医室の一角にある研修医と同じ机に向かい、改訂 3 版に丁寧に書き加えをされている。そのような姿を毎年、拝見してきた。初めて山中先生をお招きした 2009 年は、第 3 版が出版された年である。

たとえば今回(改訂 4 版)の「中毒」(p.225)の項目を見てみると「Toxidrome」のことが新たに書き加えられている。中毒分野でのとても大切な考え方である。おそらく第 4 版が出版されるまでの期間で、山中先生は「Toxidrome」を第 3 版に書き込んだのではないかと想像する。著書に触れさせていたがきながら、山中先生の臨床を垣間見させていただいている私には、そのような変化を随所に読み取ることができる。

熱心に改訂が繰り返される本書は、まさに山中先生の日々の臨床に対する姿勢そのものである。失礼な言い方を承知で書かせていただくが、「子供の医師」と「One is never too old to learn」の不思議な共存を山中先生は自ら体現しておられる。自分の未熟さを常に心に留めながら、学び続けることに対する持続する志を保つ。その姿勢に深く納得がいったのだ。

もう一つ納得がいったことがある。私は臨床において大切なことは Peer reviewer を持つことであると考えている。今回、表紙に植西憲達先生のお名前を見つけた。私自身が研修医時代に直接指導を仰ぎ、以来敬意を抱き続けている臨床医だ。山中先生は毎回、新たな方々に協力を得て、本書の改訂作業を行っておられる。今回、新たな若い Peer reviewer をおく山中先生の姿勢、これこそまさに「One is never too old to learn」。

どうしても私たちは聞く前に語りたくなり、読む前に書きたくなる。しかし山中先生の本書を旧版と比べて読み込むことを通じて、語る前に聞くことがあり、書く前に読むことがあることをいつの間にか教えられる。

本書は単なるマニュアルではない。時間と共に成熟していく作品である。

1 冊の本との出会いは、人との出会いと同様、人生にとって欠かすことができない。長く付き合うことでいろいろな風景を垣間見せてくれることも、人との出会いと同じだ。そのような著書と出会えたことを心から喜びたい。

● B6 変型判 / 428 頁 / 定価 2,800 円 + 税 / 2012 年 / 南山堂